



恐るべし、コンピュータ将棋



日本将棋連盟理事 七段 中川 大輔

第18回を数える世界コンピュータ将棋選手権戦。私は将棋連盟理事として会場のかずさアークへ足を運んだ。そこで「棋史に残る出来事」が起ころうとは夢にも思わなかった。

本来なら決勝リーグについて多く書くべきところだが、エキシビジョン対局があまりにも強烈な印象だったのでお許し願いたい。

事実上の決勝戦となった棚瀬将棋—激指戦は二転三転の末、棚瀬将棋が不運の時間切れで激指勝ち。激指の優勝が決まった。

この将棋を観戦して思ったのは、確かにレベルは上がっているが、トップアマとは勝負にならない、というものだった。

今思えば、何とものん気な私であった。

そして恒例のエキシビジョン対局である.

まず一局目は準優勝の棚瀬将棋対加藤幸男アマ。

加藤さんは理詰めで指していくプロ的な将棋。どことなく北浜七段を思わせる。

棚瀬将棋先手で、中原流相掛かり▲3七銀戦法へ進んだ。そして定跡通りスラスラと図-1へ。

実は私もこの戦法をよく指しており、棚瀬将棋もなかなかやる、と見ていた。ただ、私は▲3七桂とハネる形は好まない。後に△5四角から桂頭を狙われるのが嫌なのだ。「桂をハネなきゃ良いのになあ。これでは加藤さんが勝ちだな」などと思っていた。

加藤さん少考して $\triangle 3$ 三歩.

カベ銀を直す本筋の一手。しかしこの手が本局唯一の疑問手だった。しかもそれがそのまま敗着となってしまった。これだから将棋は難しい…。

棚瀬将棋▲4六飛。この手を見たとき、私は初めてコンピュータ将棋は強い、と思った。

△3 四歩▲4 四銀△3 三銀▲4 三銀成△同金左▲6
一角(図-2).

わずか十数分の間に棚瀬将棋に対する私の評価は一変

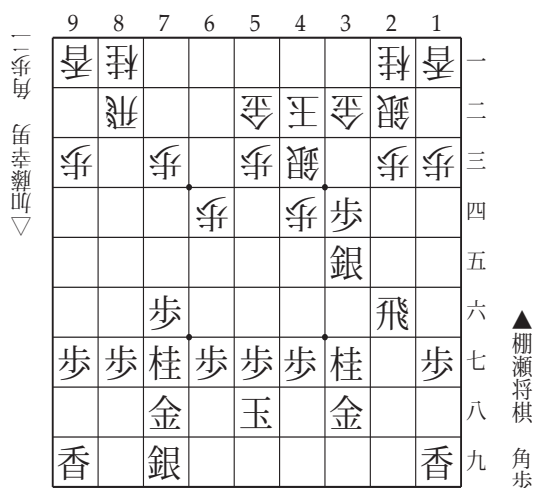


図-1 ▲7七桂まで



図-2 ▲6一角まで



した。

▲6一角の局面はタイトル保持者全員呼んできても受からない形である。

加藤さんも持時間一杯使って受けを考えたが、もういけない。加藤さんが秒読みに入ると同時に、あっという間に棚瀬将棋は寄せ切ってしまった。

最後の「ノータイム寄せ」は、コンピュータ将棋一番の見せ場で、一種のショーのようだった。見ていてため息がでてしまう。

敗れた加藤さんは呆然とするしかなかった。それはそうだろう。ミスといえば△3三歩の一手だけで、その手でさえ指したときは誰一人として悪い手とは思わなかったのだから。

もし仮に若手俊鋭四段がそこへ座っていても同じように負かされていただろう。同じく会場にいた勝又六段もまったく同意見だった。

鮮やかな棚瀬将棋の勝ちっぷりだった。

異様な興奮の中、2局目の清水上徹アマ対優勝の激指戦が行われた。

清水上さんは最近もプロ棋戦で3回戦に勝ち進んだほどの実力者である。

図-3の△6六歩でしびれた。激指快心の一手である。強い。

このとき、私の近くにいた松原先生がどちらが良いのかを聞いてこられた。どうやら△6六歩に好感触を得たらしい。

私は激指が良くなったと伝えたと松原先生「それは困りましたねえ」と満更でもない様子だった。

これはえらいことになったと思った。

清水上さんも頑張るものの激指の指し手は厳しく、終わってみれば差の縮まらない激指の一手勝ちとなった。

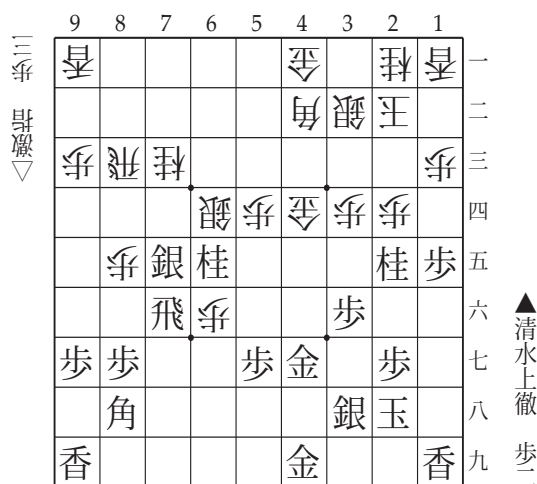


図-3 △6六歩まで



講評する中川将棋連盟理事

コンピュータがトップアマに2連勝。まさに棋史に残る大事件となった。

棚瀬将棋の棚瀬さん、激指の鶴岡さん共にまだまだトップアマとは距離があると言われていた。しかし互角に戦える日はそう遠い日ではないと思わせる内容だった。

恐るべしコンピュータ将棋。

ここまで技術向上させるには並大抵の努力ではなかったと想像する。プログラマの方々に改めて敬意を表したい。

この4日後の対北島六段戦(王将戦)で何と図-1の局面が発生した。先手はもちろん私。エキシビジョン対局が頭から離れず、気が付いたら自分も指していたという次第。

実戦は△5四角▲2五桂△1四歩▲8八銀と「人間らしく」展開していった。

対局途中で勝又六段が観戦に来たが、何やらニヤニヤしている。私も思わず笑い出しそうになり、あわてて席を外した。

この将棋は中川棚瀬連合軍の勝ちとなった。

コンピュータ将棋を観て少し強くなったような気がする。

(平成20年6月10日受付)

中川 大輔(正会員)

1968年宮城県仙台市出身。米長邦雄永世棋聖門。1983年6級で入会。1987年に四段(プロ)、2000年に七段となる。2006年に通算500勝を達成。竜王戦は2組、順位戦はB級2組に所属。2007年より日本将棋連盟理事を務める。